

鍛金部三年 高田 六藏
同 芳武 茂介

兼修できるのは二、三年生のみで、このとき、実技点数が八十点以下だったため不許可となった者が八名あった。「至昭和八年四月」工芸科実技兼修ニ関スル書類、版画兼修、セメント美術兼修ニ関スル書類（教務）によれば、翌九年は十三名、十年は十五名、十一年は十三名と兼修者が多かったが、十二年は八名、十三年と十四年が各四名、十五年が五名、十六年が三名と減っている。

③ 特待生制度廃止

各年度ごとに成績優等者を選んで一年間授業料を免除する特待生制度は明治二十六年以降毎年（同三十二年以外）実施され、明治から大正中期までは毎年大体二十名以内、大正中期以降は毎年二、三十名が選ばれて右の特典を与えられたが、和田校長の改革によりこの制度が廃止された。

④ 水谷鉄也の退官

昭和八年三月三十一日、彫刻科教授水谷鉄也が退官した。水谷については本書第二巻頁において「水谷鉄也の留学」として触れておいたが、留学より帰国後の略歴を記せば、大正七年四月教授に昇格した彼は彫刻科実習授業を指導する傍ら本校の依頼製作（銅像）を担当し、同十年までは図画師範科の手工（塑造、木彫）授業を兼任、同年から彫刻科実習担任を免ぜられ、工芸部および図画師範科



水谷鉄也（水谷茂氏提供）

の彫刻授業担任をつとめた。

水谷は朝倉文夫、建畠大夢、北村西望らの先輩で、文展に幾度か出品したが、朝倉らが官展で華々しく活躍したのとは異なり、非常に地味な制作活動を続けた。その一生に多くの銅像、建築装飾、木彫、花瓶等の制作を手がけている（「私ノ小歴ト作品」水谷鉄也。昭和十四年頃作成。水谷茂氏提供）。また、彫刻の基礎教育に大変尽力した。しかし、その作品の多くは散佚し、昭和十八年六月歿後旧宅が空襲で焼失したため、遺品も少なく、今日、その業績を辿るのは困難である。そこで、参考のために本学所蔵の水谷関係資料をここに紹介しておく。

(一) 本学芸術資料館所蔵作品

スペインの舞子（大正三年、東京大正博覧会出品）、婦人頭（同、同）、投網の男（同九年）、海老（同十五年）、女の首、うたたね女、ねむり、裸婦胸像。

(二) 文書

- 。東京美術学校旧職員履歴書
- 。留学関係文書（至大正十四年留學生ニ関スル書類（庶務））
- 。文部大臣宛申報書（控）
- 一、從明治四十四年一月廿六日報告書、「焼土 Terre Cuite」至明治四十四年四月廿日

二、從明治四十四年五月申報書、「彫塑ノ教授方法」

三、從明治四十四年十一月申報書
至明治四十五年三月申報書

四、從明治四十五年四月申報書、「大正元 布帛及メダイヌノ研究
至大正 元年拾月申報書、 年十月
及其教授方法」

五、從大正元年十月申報書、「大正二年
至大正二年三月申報書、 四月十八日 欧人ノ目ヨリ見たル我
國ノ彫刻ニ就テ」

六、「彫塑製作法及其教育法〔大正二年八月〕」

七、從大正二年四月申報書、「大正二年四月廿九日仏國パリ府
至大正二年十月申報書、 出發伊太利ニ入り諸市ノ彫刻ヲ研究シ大正二年六月廿日バ
リニ着ス其間ノ研究事項（及仏國美術トノ比較）」
「大正二年七月ヨリ十月ニ至ル旅行〔仏、独〕」

八、帰朝届

右の文部大臣宛申報書は全て「文部省外国留学生規程細則（明治三十六年改正）」に則して提出されたものであるが、水谷の場合のようにそれが全て現存する例は珍しい。水谷のみならず日本近代彫刻史研究のためにも貴重な資料と言える。なお、水谷と同時期に留学した小林万吾については、やはり小林が文部大臣に提出した「伊太利巡礼日記」（控）が残っている。

右の留学関係文書は本書第二巻刊行後に発見された。これによって第二巻の記述を補えば、水谷は明治四十四年一月二十六日から四月二十七日までパリでテラコッタの研究を行い、五月アカデミー・ジュリアンに入学して六月三十日までベルシエに就いて彫塑を研究。その後は自分のアトリエで研修し、大正二年四月から六月までイタリアを旅行、七月から十月までフランス、ドイツを旅行してい

る。

⑤ 高橋篝庵の起用

昭和八年四月十四日から九月三十日まで高橋義雄（号篝庵）が「工芸史」担任講師をつとめた。篝庵は文久元年八月二十八日生まれ。慶応義塾卒業後時事新報記者となり、明治二十年渡米し、翌二十一年米國ボークン・イー・イーストマン商業学校を卒業。その後三井銀行理事、三井呉服店理事、三井鉱山会社理事、王子製紙会社社長などを歴任して明治四十四年実業界から隠退、専ら文芸著作に従事。茶道家として著名であった。講師受諾につき四月九日付『東京朝日新聞』は肖像写真入りで次のように報じた。

上野美術學校へ民間の講師、茶道の大家篝庵高橋義雄氏が七日付で講師と決定した、来る廿日から毎週木曜日二時間づつ「茶道から見た工芸史」を講義する氏は赤坂一ツ木の自邸で謙遜しながら語る

民間で觀たもの、實驗したものを學生に吹き込む——といふのは和田校長の新らしい試みであり門戸開放の意味でも結構と思つて引受けたわけです

⑥ 石沢正男の起用

石沢正男は明治三十六年三月三十一日に東京に生まれ、水戸中学、私立日本中学、第一高等学校を経て東京帝国大学文学部美術史学科に進み、昭和三年卒業。同五年ニューヨークのメトロポリタン